

井上靖

ローマの宿

朱い門

朱い門　ローマの宿

井上靖

新潮社版

朱い門・ローマの宿

〈井上靖小説全集18〉



昭和49年8月20日発行

昭和153年10月30日3刷

定価 1100 円

© Yasushi Inoue, 1974,
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話・業務部(〇三)二六六一
五一(一)編集部(〇三)二六
六一五四(一)郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えいたします。

目次

朱い門	五
ローマの宿	一四
考える人	一六
補陀落渡海記	一八
小磐梯	二〇
フライイング	二八
古い文字	三三
明妃曲	三六
僧伽羅国縁起	三九
宦者中行説	四〇
羅刹女国	四一
ローヌ川	四二

永泰公主の頸飾り	三〇
褒姒の笑い	三六
テペのある街にて	三四三
古代ペンジケント	三六〇
崑崙の玉	三七六
アム・ダリヤの水溜り	四〇〇
聖者	四二
註解	四九
自作解題	四九

装画
加山又造

井上靖小説全集

第18卷

朱^{あか} い 門

一 章

余りにも俸給が少ないという一事を除けば、田舎の中学校の英語教師としての轟^{とろろぎ}一太の現在の状況は、さして悪いものでも響^{ひび}響^{ひび}すべきものでもなかった。学校の同僚たちも珍しく温和な善良な人物ばかりの集まりで、申し合わせたように一生を田舎の中学校教員として過すことになんらの悩みも疑念も懐かないところに時には堪^たらない歯がゆさを感じはするが、それを承知の上でやって行く分には、一日の大部分を過す職員室の空気が決して厭なものではなかった。

職員室の窓からは、丁度巾着^{きんちやく}の口のように太平洋に口を開けている湖と外海との接点が見えた。こちら側の湖の方は波が静かで潮の色も薄い、その接点だけに、いか

にも塩分でも濃そうな濃紺色を呈した大洋の潮の立ち騒ぐのが見えた。そして波がその個所にぶつかる飛沫^{しぶき}まではつきりと見えるような感じで、その波濤の響きは職員室にまで絶えず聞えていた。風向きに依ってその音は職員室の硝子を揺すぶるくらい大きく聞えることもあり、またその反対にひどく幽^{おと}かな響きが風に乘ってひっそりと運ばれて来ることもあった。

轟一太が、東京の日本生活文化協会の理事で、同協会から出している雑誌「生活」の主幹という肩書を持つ里見光延から一通の封書を受け取ったのは、やはり彼が午前中の受持ちの授業を終って、職員室の片隅の彼の席から太平洋の波が碎ける湖と海との接点に眼を遣っていた時であった。

轟はめったに物を言わない小使の矢島老人が机の上に投げるようにして置いて行ったその封書を取り上げた。封書は見覚えのあるものであった。白い大型の角封筒で、裏面には横書きで「日本生活文化協会」という一見その内容がいかなるものか判断しかねる協会名とその所番地が印刷されている。轟はこれと同じ封筒を過去に於て四、五回手にしたことがある。それは彼が雑誌「生活」へ、このK島の村民の生熊を多少ルポルタージュ風な書き方で書いて掲載したことがあり、そんな関係でその雑誌を発行している日

本生活文化協会なるものから手紙を貰ったことがあったからである。

轟はこの湖中の小さい島の中学校へ赴任してから三年になるが、この島では殆ど村民の八割までがその生活を湖から獲れる牡蠣、海苔、貝類等の水産物に依拠しており、そのためにその生活様式や風習も他処とは違って特殊なものがあった。一年中水に浸っている時が多いので、男女共特殊なリューマチ性の病気があったし、特にこの島の女は不妊症の者が多かった。また一年中風が強く小さい砂粒が絶えず吹き上げられているので、島の少年たちの眼は常に充血していた。轟は初め中学校の生徒たちに配布したカードに依って資料を蒐め、それを整理したレポートを雑誌「生活」の投書欄へ投書したのであったが、それが二、三の専門家に取上げられて多少問題になったりしたことが機縁となつて、その後協会員に推薦されたり、湖北地方の農村の実態などを書いた小報告を時折寄稿したりしていた。もともと素人調査の域を出ないものではあったが、轟にとっては興味の持てる仕事でもあり、僅かではあったが、原稿料も送られて来て煙草錢ぐらいにはなつた。

轟は協会からの封書を見て、また何か特殊な調査か隨筆の依頼であろうぐらいに思つたのであったが、いつもと違ふことは印刷された協会名の横に里見光延という敝めしい

名前が太い万年筆でかなり枯れた達筆で認められてあることであつた。

轟はすぐ開封してみた。やはり協会の名の印刷されてある便箋に、同じ書体で、轟にとっては直ぐには飲み込めないようなことが認められてあつた。こんど中国から日本の生活文化研究家五名を招聘したいといつて、協会の方へその斡旋を依頼して来た。協会では目下適當な人物を銓衡中であるが、貴殿にもし訪華の希望があれば、代表の一人になつて戴いて結構だがどうであらうか。こういったことが認められてあつた。

轟一太は殆ど息を詰めたままのような氣持で、二、三回繰返して同じ文面を読んだ。なるほど日本生活文化協会の会員に名を列ねており、生活文化の研究と言へば言えぬこともないような原稿を二、三書いていたので、生活文化研究家という名を戴いてもどこからも文句は出ないかも知れなかつたが、しかし自分で自分が生活文化研究家であるかと自問してみると頗るくすぐったい氣持であつた。しかも日本に於ける生活文化研究家の五人の代表の一人に選ばれるなどということは、甚だもつて奇妙なことと言わなければならない。

轟一太は、その日島の埋立地の上に建っている十五坪程の小さいわが家へ帰ると、去年の秋結婚したばかりの若い

妻のさきはこの話をした。何か重大な秘密事項でも洩らすような轟一太の口の切り方であったが、それを聞くさきもまたそれにふさわしい応じ方であった。

中国からの招待ねとか、日本の代表ねとか、そんなことを何度も念を押してから、
「いらしたらいわ」

と、小学生時代から賢いということで知られていたこの島育ちの女は、思い詰めた時の癖で平生より静かな口調で言った。眼はきらきらと輝き、何となく悲しげなものが色の黒い頬を走っていた。

轟一太はこうした妻の特殊な表情を見るのは今年になってから二度目のことであった。もう一回は二カ月前の三月の終りのことで、彼女が妊娠を打明けた時である。轟の子供を宿し、それはやがて自分は生むであろうということが、彼女の眼にやはり異様な光を帯びさせ、その頬の線を悲しげな固いものにしたのであった。

しかし、轟一太の方はそう簡単には中国行きを決心することはできなかった。たとえ協会から言ってきたとはいえ、国交の回復していない、しかも社会主義国である中国へ中学校の教員である自分が果して行けるものかどうか見当が付かなかったし、行こうという意志を表明することの可否さえも判断が付かなかった。校長の考えもあるだろうし、

恐らくこの問題を最後に裁決することになると思われる教育長の思惑も想像できなかった。たとえ校長も、教育長も中国行きに許可を与えてくれると仮定しても、旅券が降りるか降らないかの一番肝心な問題が残った。もし旅券が降りないような場合は、中国行きの希望を表明したという事実だけがあとに残るわけであった。恐らくその場合は、中国行きの希望を表明したということは、それをしなかったよりもいい結果を招ぶものとは考えられなかった。各方面から痛くない腹をさぐられるような結果を招く可能性は充分あった。これが日教組の代表といったような場合であるなら、大きい支えが背後にあり、問題の起る余地は先ずあるまいと思われたが、職業とは全然関係のない生活文化研究家という肩書では、いざ問題が起きたという場合は孤立無援で甚だ無力と言うほかはなかった。轟はとにかく近く上京して里見に会い、先ず話の信憑性^{しんぴやうせい}を確かめ、他の代表の顔触れも聞いて、その上で自分の取るべき態度を決めようと思った。中国へ行く行かないは別にしても、日本の生活文化研究家の少数の代表に選ばれたということは、決して不愉快なことではなかった。轟はその夜妻が床にはいつてからも自分一人は起きていて、自分を曲りなりにも一個の生活文化研究家たらしめたところの自分の書いた原稿の掲載されてある雑誌を引張り出して、それに改めて眼を通

したり、それに関する小さな反響のスクラップの頁をめくってみたりした。

轟は二時過ぎに床にはいったが眠れなかった。湖上から吹いて来る風が雨戸を鳴らしており、すっかり慣れてしまっているものは気付かないのに、その夜に限って、それが耳についた。轟は床を出て、台所へ行き、飲み残してある日本酒を一升瓶より湯飲茶碗にあけて、下戸の彼にしては珍しくそれを喉を鳴らして飲んだ。すぐ顔の赤くなるのが頬の火照りで判った。しかし、それでも頭の芯は冴え返っていた。

眠るのを諦めると、轟は暁方まで暗い中で眼を天井に向けて仰向けに横たわっていた。さきの静かな寢息が一定の間隙を置いて、いかにもその性格のように几帳面に聞えていた。轟は眠れないままに生活文化という言葉の意味を考えた。はつきりとその言葉の意味する実体は掴めなかった。甚だ曖昧模糊とした言葉で、同じように、いやそれ以上に生活文化研究家なるものの実体が判らなかった。研究家というのだから学問的研究をしている人物を指すと考えねばならなかったが、生活文化なるものを研究している人物で、その名を冠するにふさわしい適当な人物を思い浮かべることはできなかった。古代の風俗や習慣を研究している人はあったが、それは風俗学者とか歴史学者とかいう名で呼ば

るべきもののようであった。現代人の生活を研究している人物というものは考えることが出来たが、しかし、それは医学とか、建築学とか、心理学とか、社会学とかの領分に包含されてしまい、生活文化という部門が学問の世界で占める椅子はどこにもないようであった。

ひどく味気ない気持が頭のどこかに忍び込んで来た時、轟は興奮が覚めて、初めて眠りに落ちることが出来た。

轟が上京したのは、里見光延から手紙を受け取ってから五日程経ってからであった。日曜の午後一時何分かの急行に乗り、東京駅に七時に着き、その夜は目黒の親戚の家に泊めて貰い、翌日、丸の内の大きいビルの一室に里見光延を訪ねて行った。

日本生活文化協会の事務所と雑誌「生活」の編集部は同じ部屋にあった。同じ部屋にあるというより、一つのが二つの名称を持っている感じで、二つの名前を認めた二枚の名札が入口の硝子戸の横に掲げられてあった。

里見はその日に限って出社が遅いとかいうことで、二十人程の社員が雑然と机を並べている同じ部屋の一角に獨立で仕切った里見の机の置いてある場所で、轟は無聊な時間を二時間近く過した。窓からは向い合っているビルの上層部の何十かの窓だけが見えた。どういふものか、どの窓か

らも電燈の灯っているのが見え、そのビルの壁面に当たっている五月の明るい陽光と奇妙な対照を見せていた。暑かったので窓を開け放ちたかったが、窓を開けると、里見の机の上の書類が飛んだ。

正午を少し廻った頃、里見光延は五尺二寸程の背の低い肥満した軀を部屋へ現わした。もうこれ以上は詰め込めないという程物を詰め込んだ手提鞆を机の上に投げ出すように置くと、

「暑かったでしょう、閉め切って」

と言って、直ぐ窓を開け、窓際に立ったままハンケチで顔の汗を拭き、そのままの姿勢で轟の方は振り向かないで、

「手紙を読んでくれましたか」

と言った。轟がわざわざそのことで出向いて来たことを告げると、

「これから手続きを取っても、結局向うへ行くのは秋になると思いますよ。北京の秋は実にいいですよ。多少無理をしても是非いらっしゃい。向うで招いてくれるんで金は一文も要らんと思うんです。これまで他の団体が招かれた例からみると、往復の飛行機賃も滞在費も全部先方持ちの筈です。金がかかるとなると、お勧めできないが、無償ならね、貴方。——轟さんもこの際は非行くことをお勧めします。いいですよ、北京は」

と、また北京のことを言った。そしてやっと汗が引込んだといった顔付きで、里見は窓から離れると、轟が腰を降ろしている椅子より少し高い自分の廻転椅子に腰掛け、いらっしゃい、いらっしゃい、御一緒に行きましようよ、と言った。轟は里見光延とは初対面だった。里見は自分が一度しか会ったことのない人物を自分と一緒に中国に連れて行くとしてしているわけで、その点腹が太いというのか、物にこだわらないというのか、そんな風な人物に見えた。初対面の印象では、負けん気で一人飲み込みのところはあるにしても、格別腹黒いところのあるような人物には見えなかった。轟はここへ来る前に協会から出ている名簿で、里見光延の年齢を調べていた。明治四十年生れで、満で丁度五十歳である。頭髮はかなり薄くなっている、白髪もかなり多いが、それを一本の乱れも許さないとといったようにチックで固く押えつけてあった。

名簿には北海道生れで、私大の政経科卒とあるだけで、前歴は何も記してなかったたので、彼がこれまでいかなる地位や職業にあったかということは知ることはできなかった。「推薦して戴いて有難いですが、一体、他にはどういう方がいらっしゃるんですか」

轟が訊いてみると、

「大浦さん、御存じでしょう、大浦太郎さんです。うちの

雑誌にも時々書いて貰っていますが、現在大学の講師をしています。取り扱っている時代は古いですが、しかし、歴史学者の中で生活文化の面からものを言っている人はこの人一人だけでしょう」

大浦太郎という名なら轟も知っていた。官立大学で東洋史の講座を持っており、著書も一、二冊は持っている筈である。

「大浦さんは是非行きたいと言っています」

「大浦さんってお幾つぐらいですか」

「僕より二つか三つ若い筈です。四十七、八かな。それから花輪久彦、服飾ジャーナリストですな。もう一人加久山惣三君、これは罐詰会社の専務ですが、『生活』にも、一、二回何か書いて貰ったことのある人です。罐詰会社の専務ですから、まあ、実業家と言うべきでしょうが、本人は生活文化の研究者と聞いている」

里見は言うのと、無遠慮な声で笑った。罐詰会社の専務の方は知らなかったが、服飾ジャーナリストの花輪久彦という名前には記憶があった。書いたものは読んだことはなかったが、いろいろな雑誌で見かける名前であった。

「大浦さん、花輪久彦、加久山君、私、それに貴方がいらっしゃるれば貴方、貴方が行かないのなら、松波華子にでも交渉しようかと思っています。この方は話せば大悦びで

飛びついて来ますがね」

松波華子というのは高名なデザイナーで、これまで里見があげた名前の中では、これが一番有名であった。

「私など代表なんておかしくありませんか」

轟が言うと、

「そんなことはありませんよ。——貴方の書かれたものは随分問題になったじゃありませんか。大浦さんも褒めていました。大体、貴方を加えたらいいと言いつ出したのは大浦さんなんです。貴方が中国に行ったら、非常に得るところがあるんじゃないですか。他の連中は結局は見物だが、貴方の場合は違うと思うんです」

轟はまた自分の書いたもののことを思い浮かべていた。大浦が褒めてくれたということも嬉しかったし、それからまた大浦が推薦してくれたということで何か自分に初めて一行に加わる資格ができたような落着きも覚えた。

この時の里見の話では、轟が承知すれば五人の名前を一応直ぐ中国の方へ報せてやる。中国ではこちらの言っている人物について、調べることがあるなら調べるであろうし、そしてそれでいいとなったら正式の招待状を寄越す筈である。それが多分秋の初めになると思う。その上でこちらは旅券を申請する段取りになる。しかし、この旅券に恐らく一カ月ぐらいの日数は費すだろう。

「羽田を立つ運びになるのは、結局十月か十一月になると
 思いますね。とにかく、一応貴方に行く気持があるなら、
 行く方向へ話を進めてみたいかがです。恐らく教師とし
 て特殊な事情があるでしょうが、向うから正式の招待状が
 来るまで、何もかも伏せておくんですな。何かとうるさい
 でしょうからね。——そして招待状を貰ってから運動を始
 めたらいかがです。今から公表すると、却って支障が起る
 でしょう。それより間際になって短い期間に、いっきにや
 った方がいい。その時になって駄目なら、また駄目の時の
 ことですよ」

轟は里見の話を聞いてみると、次第に気持が軽くなった。
 一応立候補しておく方が、おかないよりよさそうであった
 が、最後の決定は二、三日待って貰うことにした。

この日は、轟は一時間程で里見の許を辞去し、その足で
 東京駅へ行って、発車間際の下り列車に飛び乗った。

列車の中で、轟は中国行きのことばかり考えていた。そ
 のことがどうしても頭から離れなかった。行けるものなら
 中国へは行ってみたかった。二人兄弟のうちの弟が終戦間
 際に満洲で戦死していたので、弟の死んだ大陸の土も踏ん
 でみたい気持もあったし、新しい社会主義国家というもの
 も自分の眼で見たい気持もあった。これから何年か
 すれば、自由に中国へ旅行できる時代は来るかも知れな

ったが、そうした時代が来ても、旅費を自分で負担するど
 なるかと、そうそう簡単に実現できそうな旅行にも思われな
 かった。こんどの場合には、一文も要らなかつたし、しかも
 曲りなりにも代表団の一人として向うから招きを受けて行
 く形を取るわけである。これに応じない法はないであらう。
 轟は家へ帰ると、その夜、妻のさきと相談し、中国行き
 の決意を固め、その由を里見宛ての手紙に簡単に認めた。
 そしてそれを翌朝、家の横手の白い砂の上に立っているポ
 ストへ投げ込んだ。

春から夏にかけて、轟は何となく落着かない気持で過し
 た。雑誌「生活」への寄稿の依頼はあったが、その後里見
 光延からは中国行きに関する何の連絡もなかった。果して
 代表団の名前を中国の方へ申し送ったのか、送らないのか
 それさえはつきりしなかった。轟は学校の勤務の余暇に、
 付近の農村の生活調査の仕事を新しく始めていた。中国行
 きの事件に半ばあおられたような形で、こんどは今までに
 ない本格的な大がかりな調査であった。日曜は殆どこの仕
 事のために費_つっていた。調査対象には三カ村、八百軒を選
 び、あらゆる方面から中農以下の生活の実態を掴み出そう
 とした。轟は夏休暇もこの仕事に全部費_つうつもりでいた。
 時折、中国行きのことを思い出して、

「結局、取りやめになったんじゃないやありません？ 何とも言
って来ないなんて変だと思ふわ。どうも話がよすぎると思
いましたわ」

さきは言った。轟は、その度にそんなことがあるものか
と強く言ったが、彼自身言葉に自信がなかった。

夏休みにはいった最初の日に、轟は日帰りの予定で四時
起きして、五時の一番列車で上京した。そしてその日の午
刻近い時刻に、丸の内の生活文化協会を訪ねた。

轟が社員の一人に案内されて、里見の机のところへ行く
と、ワイシャツを脱いでランニングシャツ一枚になって来
客と話している里見の姿が見られた。里見は轟の顔を見ると、やあというように軽く頭を下げたが、轟に坐れとい
うように椅子の一つを指し示しただけで、客との話を切らな
かった。客は轟より少し年長の暗い感じの青年だった。こ
の方は背広をきちんと着て、ネクタイもつけていた。背広
の色は黒っぽくて、見るからに暑そうであった。服装はか
りでなく、額にかかっている長髪も鬱陶しく感じられた。
里見は露わな両の腕を組んだり、それを解いて折り曲げ
たりしながら、口からは絶えず言葉を発射し続けていた。
声は大きかった。

客の方は押し黙っていて、時々、額にかかる髪を掻き上
げては短い言葉を口から出した。「そりゃ違う」とか「あ

んたは」とか、そんな言葉だった。それがまた里見の声を
一層大きくさせた。

轟は初め二人が口論でもしているのかと思っていたが、
そうではなく、二人はアメリカの若い映画女優について、
どこが新しいとか、新しくないとか、そんなたわいのない
ことを大真面目で論じ合っているのであった。話が切れる
と、里見は気が付いたように、
「こちらは花輪久彦君です」

と、客を紹介した。轟が名刺を出すと、花輪もまた名刺
を出した。花輪は、轟が何となく頭に描いていた人物とは
かなり違った風貌を持っていた。花輪久彦という多少軽薄
な、しかし明るい名前とは全然違った感じだった。向い合
うと、上の前歯の一本が欠けているのが解り、それも手伝
って、顔付きも風采も少し陰気な崩れた感じであった。

轟が里見光延に中国行きがどうなったかを訊くと、

「まだ何とも言って来ませんが、もうそろそろ来るでしょ
う。向うは向うで、ちゃんとした国のお客さんとして招待
するんですから、多少こちら側の人物調査というようなこ
ともやるんじゃないですか」

里見は言った。

「大丈夫かな、俺など」

横から花輪が言った。歯が欠けているためか声が洩れる

感じてあった。

「ひっかかるとすれば君だな。中国の方で拒否する人物があるとするれば君だ」

「来てくれなくてもいいってか」

「そう。それからこちらの旅券の降りない場合でも、まあ、君のせいだな」

「両方から嫌われるか。——黴菌^{ばい菌}みたいだな」

それから花輪久彦は笑った。

里見はどこかへ行くらしく、立ち上がって、ワイシャツを舐^なめながら、

「轟さん、何か特に用事がありますか」

と訊いた。用事はないが、その後どんな具合になっているか様子を見に来たのだと言うと、

「連絡があり次第お知らせしますよ。めったに支障はないと思うんです。現在、日本人もかなりの人数が招ばれて行っている、通訳の関係とか、ホテルの関係とかで、先方でもなかなかスケジュールが組めないんじゃないですか」

それから里見は、

「僕は他処で人と会うことになっているので、これで失礼します。いついらしってもお構いできませんが、まあ、勘弁して下さい」

そう言って、社員にタクシーを拾うように命じて、あた

ふたと出て行った。

里見が出て行くと、

「忙しい人間ですよ。よく舐^なめ廻^{まわ}ると思う。感心しますね」

花輪は言って、

「どうです。そこらで冷たいものでも上がりませんか。ここにいる限り水も出ませんからね」

その言葉で轟も腰を上げた。一緒に中国へ行くことになっているこの人物と少しでも親しくなっておく方がいいだろうと思った。

ビルを出ると、二人は並んで舗道を有楽町の方角へ歩いて行つたが、途中で大きなビルの地階にある喫茶室を見付けて、そこへはいって行つた。

花輪は冷たい珈琲^{コーヒー}をストローで少しづつ啜^{すす}った。胃腸が悪いので、冷たいものが一度に胃にはいることを避けるためだということだった。

轟が中国行きの実現の可能性について、花輪の意見を訊いてみると、花輪は先刻里見と話していた時とは違って真面目な口調で、

「里見氏が言うように、もうそろそろ正式の招待状が来るんじゃないですか。僕の場合は、仕事の関係でいま来られると困ります。一日も遅い方がいいんです」

それから自分の考えでは、招んでくれる時期は秋の国慶

節を外した時だと思う。国慶節前後は、中国もお客さんで大変だから、政治家とは違ってわれわれのような客の招待はその時期を外した時に選ぶに違いない。そんなことを言った。

「その代り、招待の通知が来ると、それと向うから指定して来る時期との間には余り日数がないんじゃないですか。二十日とか一月ぐらいらしいですよ。今のうちから準備すべきなんですが、それがなかなかできません」

「そんなにあわただしいものなんですか」

轟は言った。

「他の団体の場合を聞いてみると、そうですね」

「僕などは、招待の通知があつてから、学校関係のことを処理しようと思つてゐるんですが、それでは少し無理でしょうか」

「学校関係のことと言つと、どういふことなんです」

「まだ校長にも、県の関係者にも何も話してないんです」

「許可を取つてないんですか」

「そうです」

「それでしたら、至急に手続きを取るべきでしょうね。でないで、第一支障ができた場合困りますよ。なんとか、それをうまく処理するだけの余裕がないと」

「里見さんは正式の通知があるまで伏せておけと言うんで

す」

「だめ、だめ。——里見氏の言うことなんか諾^ういていたらひどいことになりますよ。あのおっさんはおっさん流に何でもやりますが、それは彼だけに通用することです。他の者には彼の真似はできませんよ」

そうかも知れないと轟は思った。それから三十分程雑談してその店を出ると、その店の前で轟は花輪と別れた。

轟はその夜遅く島へ帰つたが、その翌日直ぐ校長の八波を訪ねて、中国行きのことを話した。

八波はひどく複雑な顔をした。轟が日本の代表団の一員として中国から招かれるということがまず第一に信じられないことのようにあつた。それからもう一つは自分の学校に中国から招かれる職員が出たということが何を意味するかが直ぐには呑み込めないらしかつた。悦ぶべきことか、悦ぶべからざることか、判断が付かなかつた。それからその問題の処理をいかにすべきかということになると、この方は全然予想も付かなかつた。到底自分の手に負えないものがいきなり自分の前に立ちはだかつたような気持であるらしかつた。

小心で気の弱い校長は、ジュースをやたらに若い教師に勧め、一カ月授業を休むことは構わない。そのことは自分が何とかなり取り計らうと、授業のことばかりに問題を